

〔研究ノート〕

原三溪と仏教絵画

実業家として、また茶人としても名高い原富太郎（号三溪、1868～1939）は、希代の美術コレクターとしても知られます。原コレクションは古美術作品のみならず、自らがパトロンを務めた日本美術院の画家が手がけた同時代の作品までも対象とし、何れも原自身の鑑識眼をもとに収集されたものでした。横浜にあった原の邸宅「三溪園」では、コレクションが研究者や新進気鋭の作家に披露され、作品について議論をする研鑽の場となっていたのです。今村紫紅、小林古径、安田叔彦などの画家、古筆研究者の田中親美や哲学者の和辻哲郎といった錚々たる顔ぶれが集いました。当館の初代館長を務めた美術史家・矢代幸雄（1890～1975）は二十代の頃に原と出会い、この場に加わっていました。矢代は原との出会いによって日本美術への造詣を深めただけでなく、原の鑑識眼や収集方針、美術作品への接し方を修得することとなったのです。原は自身のコレクションから名品を選びすぎり、自らの解説を付した『三溪帖』という豪華な図録

を自費出版するつもりでした。残念ながら出版を目前に関東大震災で焼失してしまいましたが、その草稿の元になったと思われる手記が残されており、矢代が紹介しています（矢代幸雄「三溪先生の古美術手記」同「忘れ得ぬ人びと」岩波書店、1984年所収）。そこには、個々の作品に対する評価や鑑賞の要諦が記されています。本稿では「手記」を手がかりに、原の仏教絵画へのまなざしについて探ってみたいと思います。

原コレクションの仏画で最も有名なものが、「孔雀明王像」（東京国立博物館・図1）です。優美な彩色と繊細な切金の技法が印象的な、平安時代を代表する仏画の一つです。明治37年（1904）、当時35歳の原が一万円という破格の値段で井上馨から購入したことが知られます。手記には「美術品ニ壱万円ノ価ヲ有スルニ至リシハ、此ヲ以テ嚆矢トナス」とあり、またそれだけに当時は騒動になったようで、「未ダ美術ニ於ケル一般ノ好尚モ亦本邦富ノ実力モ共ニ甚低キ事ナレバ、益

モナキ骨董品ニ国富ヲ消耗スルガ如ク考エラレシモ無理ナラヌ事」と記します。しかし、「其後十四五年ヲ経過セシ大正七八年頃ニハ、芸阿弥山水ガ三十万円、信実歌仙巻物ガ三十万円」となったといい、特に問題になることはなく、物価の上昇、経済規模の拡大に驚く旨が記されます。では、原は本作品のどこに惹かれたのでしょうか。手記では「賦彩優麗ニシテ繊弱ニ陥ラズ、殊ニ藤原中期文華ノ爛熟セルヲ徴スルニ足ル可キ同時代ノ代表品」と評価をしています。

このほか手記には、数ある日本の仏画の中で「余ガ尤モ優秀ナリト信ズルモノ」として、「法隆寺金堂壁画」（法隆寺）、「阿弥陀如来像」（阿弥陀三尊像のうち・法華寺）、「水天像」（十二天像のうち・西大寺）、「釈迦金棺出現図」（京都国立博物館）、「十一面観音像」（奈良国立博物館）、「普賢菩薩像」（東京国立博物館）などが挙げられ、とりわけ「阿弥陀如来像」を「壁画ヲ除ケバ、本邦仏画中ノ第一ナリ」と高く評価しています。いずれも美術史の教科書に必ず登場する名品です。

さて、当館所蔵品で知られるのは、かつて「多武峰曼荼羅」と見なされていた「笠置曼荼羅」（図2）です。十三重塔が大きく描かれることから、当時は談山神社の景観を描いたものと理解されていました。手記では、作品に描き込まれた巨大な磨崖仏を探しに、実際に談山神社周辺を訪ね歩いたことが懐古されています。結局、笠置寺が舞台ですから当然見つからず、辺りが暗くなり、迷いながら宿まで帰ったとあります。本作品に対する評価はといいますと、「結構布置、一ノ山水画トシテ鑑賞ニ値ス可キモノ」と記されます。先に挙げた仏画も同様ですが、

三溪が評価する点は、どのような尊像が描かれているかという図像や制作を支える教義、歴史的背景ではなく、「色彩亦鮮麗」「粧飾色彩ノ進歩ヲ極メタル」「優麗」といった表現に関する評価が重視される点は注目されます。

このような「鑑賞ニ値ス可キモノ」すなわち、「鑑賞価値」を重視する点は、矢代にも受け継がれ、当館のコレクション収集の指針となっています。原の美術作品との向き合い方を肌で感じていた矢代には、次のような信念がありました。「何ものにもとらわれない良い鋭い目を持っていれば、新古いずれにある美といえども、照破し感得し得ないはずはない」（矢代幸雄「私の美術遍歴」岩波書店、1972年）。

当館に所蔵品される4件の国宝と31件の重要文化財のうち、原三溪旧蔵品は15件を数え、まさにコレクションの核となっています。個々の作品は、それ自身高い芸術性と鑑賞価値を持っていますが、それらの価値を見出し、愛玩し、大切に守り伝えた原の想いが、目には見えませんが作品を構成する要素の一つとなり、作品の「重み」となります。これは原三溪旧蔵作品だけでなく、当館所蔵品の一つ一つが、そうした想いを継承し、「美のための美術館」という矢代が具現化した理想の美術館・大和文華館で、現在も人々を魅了し続けています。今年は開館60周年という節目に当たります。個々の作品が持つ、そうした人々の想いにも心を寄せて頂けたら幸いです。（古川攝一）

※図1は東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録（仏画編）』東京美術、1987年より複写いたしました。



図1



図2

季刊 美のたより No.210

令和2年4月4日

発行 大和文華館